

## ヤスクニ・レポ 272

### 「剣を打ち直して鋤とし 槍を打ち直して鎌とする」

～ロシアによるウクライナ武力侵略戦争の中、和解と平和解決を祈りつつ～

吉村弘司(日本キリスト改革派大宮教会・長老)

#### 序(ヤスクニ・レポ 264(2022.3.18)抜粋掲載)

前回、ヤスクニ通信ヤスクニ・レポ 264「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる」～ロシアによるウクライナ武力侵襲で「地の平和」崩壊の危機に！～(吉村弘司)では、序(「地の平和」崩壊の危機)先月2月24日に、突如、ロシアがウクライナに侵襲(侵略)しました。戦争の惨禍にいる人々の嘆き、悲しみ、涙が止まりません。・・・日本キリスト改革派教会(大会「宣教と社会問題に関する委員会」委員長 弓矢健児)は、2022年3月4日に、「ロシアによるウクライナ侵略に抗議し、平和的手段による解決を求める声明」で主イエス様のみ言葉「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる」(マタイによる福音書 26章 52節引用) 1.東西冷戦の再来、核兵器の使用の危機! 2.ウクライナが、南北に分断されたドイツ・朝鮮・ベトナムの悲劇の歴史再来を危惧! 3.ロシアとウクライナの和解・平和の道を求めて! 本戦争は8ヵ月過ぎても継続中です。

#### 1「戦争の論理(道)」から「平和の論理(道)」へ!

(諸国民の裁き)「諸国の民にこう呼ばわり、戦いを布告せよ。勇士を奮い立たせ/兵士をことごとく集めて上らせよ。お前たちの鋤を剣に、鎌を槍に打ち直せ。弱い者も、わたしは勇士だと言え。」(ヨエル書 4章 9~10節)では、主なる神の裁きの個所に現在の戦争の論理(道)が示されており、(終末の平和)「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし/槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず/もはや戦うことを学ばない。」(イザヤ書 2章 4節)は聖書の平和の論理(道)が示されています。ニューヨーク国連広場に「イザヤの壁」(Isaiah Wall) (「非戦・平和への願い」)に大預言者イザヤの言葉が刻まれています。(KJV: ISAIAH2:4)

「THEY SHALL BEAT THEIR SWORDS INTO PLOWSHARES, AND THEIR SPEARS INTO PRUNINGHOOKS; NATION SHALL NOT LIFT UP SWORD AGAINST NATION, NEITHER SHALL THEY LEARN WAR ANY MORE. ISAIAH」

3月2日、平和の祭典と言われる冬季「パラ・オリンピック」の前に戦争の現実を目にした国連総会(193ヶ国)は、「ロシアによるウクライナ侵襲を

受けて開催した緊急特別会合で、領土保全や武力行使禁止を定めた国連憲章違反と侵襲を糾弾し、軍隊の即時撤退を求める対ロシア非難決議案を141ヶ国の賛成多数で採択しました。その後、10月4日にロシアはウクライナ4州(ドネツク人民共和国、ルガンスク人民共和国、ザポロジエ、ヘルソン)を一方向的に併合可決しました。」これに対して国連総会は、10月12日にロシアのウクライナ4州「併合」非難決議案には、国連加盟193カ国のうちの143カ国が賛成し、中国やインドなど35カ国が棄権、反対はロシア、ベラルーシ、北朝鮮、シリア、ニカラグアの4カ国でした。しかし、強制力を伴う、国連・安保理常任理事国ロシアの拒否権行使で、国連の機能不全と指摘の声もある中、「イザヤの壁」にある「非戦・平和への願い」実現を祈ります。こうした事態に、戦前の日本が武力で中国の満州を支配し、韓国併合(1910-1945)後、日本が敗戦・破滅に至った歴史を想起すべきです。

#### 2「靖国の論理」と「ロシアの戦争の論理」の類似性

靖国神社の役割は、日本の侵略戦争の精神的支柱として皇国史観により、東洋平和の実現を目指す「大東亜共栄圏」思想で日本を破滅に陥らせました。他方、現在のロシアの侵略戦争の意図は、かつてのロシア帝国、スターリンの独裁国家の実現のため、ロシア正教も宗教利用して戦争継続している点が似ています。人間の命を掛けた戦争には、いつの時代にも、人間の心の支配が必要です。宗教(靖国神社、ロシア正教他)が政治に利用されたり、宗教が政治を利用(カトリック教会の歴史、安倍元首相銃撃事件での元統一教会問題)する例もあります。宗教が戦争に利用される危険性を知る必要があります。聖書にある皇帝(カイザル)に税金を納めることが、律法(神の教え)に適合しているかどうかのファリサイ派の質問に対して、デナリオン銀貨の肖像と銘が皇帝(カイザル)との返答に、「イエスは言われた。「では、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」」(マタイ 22:15~21)の個所が、聖書の政教分離の根拠とされています。政治と宗教が一体となり、悪魔的な戦争になることを歴史は証明しています。「平和を実現する人々は、幸いである、/その人たちは神の子と呼ばれる。」(マタイによる福音書 5章 9節)主のみ言葉は、平和に

逆行する戦争の中でこそ覚えるべき神の言葉です。

### 3.義戦論(聖戦論)から非戦論(絶対平和主義)へ

現在のロシアによるウクライナへの侵攻(侵略)戦争では、ロシアによる国際法違反の数々(民間人虐殺、民間施設インフラ攻撃他)に対して、欧米等は、ウクライナ側の戦いを正義の戦争として武器支援が継続され、ロシア側は核兵器使用可能性等の恐怖をウクライナと世界に与えています。こうした時に、内村鑑三の「非戦論」(絶対平和主義)に注目したい。「内村鑑三」鈴木範久著〔岩波新書:1984(同P129-143)〕には、〔非戦論 義戦 日清戦争では「義戦」を唱え、賛成した鑑三であったが、結局、日本の慾のための戦いであったことを知ると、それが終わるやいなや、すぐに「義戦」としたことを深く恥じた。かわって日露戦争では、はじめから非戦論に立った。ところが、日清戦争の結果と悔恨の念が、そのまま鑑三を非戦論者にさせたのではない。鑑三が、日清戦争の終結にあたり、いたく恥じたのは、それが、世界に向かって弁じたように義のための戦争ではなかったことだけである。世にある「義戦」そのものは、まだ認めていたといえるのだ。・・・鑑三は、まもなくして起こった、西欧列強に対する小国ギリシャの戦いには・・・声援を送り、・・・米西戦争については、アメリカが勝つ

てキューバがスペインから自由になることを望み「この戦争によって・・・この地球上に、より多くの正義が訪れるであろう」と述べている。・・・「絶対的非戦」聖書の言葉との出会いは・・・次の2つの聖句で知られる。「平和を求むる者は福(さいわい)なり。その人は神の子と称(とな)えらるべければなり」(馬太(マタイ)伝5章9節)「イエス彼に曰いけるは、爾(なんじ)の剣を故処(もと)に収めよ、凡(すべ)て剣を取る者は剣にて亡ぶべし」(同26章52節)】

### 4.日本の平和憲法を世界平和と和解の道しるべに!

77年前、日本は、天皇を神聖不可侵とした大日本帝国憲法の下、天皇の軍隊(皇軍)がアジア諸国への侵略戦争で日本人310万人が戦死し、アジア諸国民の戦争犠牲者は2000万人とされています。現在のロシアによるウクライナ侵略戦争を考える時、この歴史の事実を忘れてはなりません。最近の日本は、ウクライナ戦争の現実から、日本の平和憲法9条を変更して、武力で平和を守ろうとする流れが加速しています。今こそ、日本と世界の指導者は、日本の平和憲法(特に9条の戦争放棄)がこうした侵略戦争の犠牲者の惨禍でもたらされたことを想起すべきです。

## 2022年10月21日例会奨励

### 「真理を明らかに」使徒15章1-21節 柴田 智悦(日本同盟基督教団横浜上野町教会牧師)

序. AD48頃開催された、教会における最初の公な会議がエルサレム会議です。救われるために割礼は必要か否か、という問題が話し合われ、最終的には、救いは信仰のみによる、ということが確認され、公式な見解として各地の異邦人教会に文書が回されました。

I. 会議は平等に行われますが、それは教会のかしらであるイエス様の御心を聞くためであり、神である主の真理が生きるためです(マタイ18:19,20)。大切なのは、「主の真理」です。パウロとバルナバは「神が彼らとともにいて行われたことを、みなに報告」しました(15:4)。

II. エルサレム会議の具体的な議題は「福音と律法」ということです。イエス様を信じる信仰の他に、何か頼みとするものを持ちたい、という誘惑の問題です。しかし、真理は「神は、私たちに与えられたと同じように異邦人にも聖霊を与えて、彼らのためにあかしをし、私たちと彼らとに何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです。・・・私たちが主イエスの恵みによって救われたことを私たちは信じますが、あの人たちもそ

うなのです。」(使徒15:8-11)と、いうことです。律法によっては救われない、という証拠が旧約聖書の歴史です。ただ、「聖書のみ、信仰のみ、恵みのみ、キリストのみ、神に栄光のみ」が宗教改革の中心でした。それこそが、今も私たちにとって啓示の源であり信仰の根拠です。真理は私たちに自由にするのであって(ヨハネ8:32)私たちに縛るものではありません。

III. 私たちは、信仰に何かを付け加えて救われるのではなく、信仰だけで救われていることに満足すべきです。信じた者は事実、神の子とされて、私たちの生活全体が主の御手の中にあるのです。私たちはイエス様のものとされたのですから、そのように歩むべきです。救われるために必要なのは信仰のみです。イエス様の十字架の贖いという犠牲が先にあったからこそ、私たちは主に愛されており、主のものとされているのです(イザヤ43:1,4)。だからこそ、主に感謝し、イエス様に精一杯お従いし、イエス様の御体なる教会にお仕えし、「わたしの名で呼ばれる異邦人がみな主を求めようになる」ことを祈りましょう。